

編集後記

大相撲九州場所が終わり、福岡国際マラソンが終わると同時に福岡にも冬が到来します。会員の皆様にはお元気でお過ごしのことと存じます。遅くなりましたが、本研究懇談会会誌第23巻2号をお届けします。

今回の巻頭言は、本年10月に愛知工業大学で開催されました Frontier Research Project on Materials for the 21st Century -Materials Development for Environment, Energy にご出席されましたチェコのチャールズ大学の Miroslav Polasek 教授にご寄稿いただきました。また、国内からの巻頭言は山梨大学の木羽信敏先生に「妥当性試験」というタイトルでご寄稿いただきました。FIA 法を利用して民間で蓄積されている環境計測データが、本誌にテクニカルレポート等として公表され、本誌のレフリー及び読者の評価を受けることにより、効率的な公定法に改良されることをご提言いただいています。FIA 法の公定法化が余り進んでいない中、本研究懇談会としてもこのようなボトムアップ的な努力が必要である思いがいたします。

パーソナルレビューの欄には、東京薬科大学名誉教授の高村喜代子先生にご寄稿いただきました。「過酸化水素の FIA」からの贈り物」というウィットのあるタイトルからご推察いただけますように、過酸化水素の FIA の研究を通じて Dasgupta 教授との出会いの経緯が綴られています。

指針欄には、静岡福祉大学の石井幹太先生、梅山朋恵先生に「FIAとユニバーサルデザイン」と題するご寄稿をいただきました。ユニバーサルデザインとは元来福祉関係の用語ですが、その考え方は FIA 法と共通する概念が多い

ようです。FIA 法の新たな展開を期待したいと思います。

総説の欄には、チェンマイ大学の Kate Grudpan 教授に「Down scaling」のタイトルでご寄稿いただきました。マイクロタスを始めとして、マイクロチップ技術など、分析のダウンサイジング化が進められております。Ruzicka 教授が Lab-on-Valve (LOV) という考え方を提案されていますが、これに対して Grudpan 教授は SI 法を用いる Lab-at-Valve (LAV) を提案し、いくつかの応用例が示されています。

研究論文の欄には、今回投稿があったのは残念ながら国外からの3報の論文のみでした。木羽先生のご提言のように、FIA 法の技術報告や FIA 法を利用した分析データの報告も会員の皆様に有用な情報をご提供できるのではないかと思います。会員の皆様からのたくさんのご投稿をお待ちしております。トピックスの欄には、マイクロチップ内での効率的な反応場を与えるタンパク質の固定化に関する1件の記事をいただきました。

国内の学会情報は徳島大学の田中秀治先生まとめていただきました。また、FIA Bibliography は、これまで高知大学の受田浩之先生にお願いいたしましたが、今回からは岡山大学の高柳俊夫先生にバトンタッチをお願いしました。100以上のジャーナルを検索していただきました。大いにご利用いただければ大変うれしく思います。

本年はたくさんの会議や講習会・講演会があり、報告の記事が満載です。今後とも、会員の皆様との情報交換をたく、たくさんのご投稿をお待ちしております。

JFIA 編集委員長
今任稔彦